

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：33910

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K21794

研究課題名（和文）パラダイム転換にもとづく「親性」生成に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research for Multilevel Parenting Program based on a paradigm shift

研究代表者

辻本 雅史（Tsujimoto, Masashi）

中部大学・その他の部局・顧問

研究者番号：70221413

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,900,000円

研究成果の概要（和文）：子育て困難な現状に対するパラダイムシフトをめざして、従来の子ども研究や子育て支援の方策研究にとどまらず、母性や父性を包摂する「親性（おやせい）」を基軸とした領域横断的な基礎研究及び実践研究を遂行した。「親性」を、社会成員がひとしく身につけるべき生涯発達の資質と捉え、その観点から「協同子育て実践学」の研究領域の開拓に努めてきた。併せて「親性」生成を可能とする教育プログラムを構築し、研究成果を、家庭・学校・諸施設など実践現場に展開する方策を探ってきた。なかでも大学も含めた諸学校の教育課程にその成果を組み込み、家庭科教育に収まりきらない、新たな子育て実践モデル構築を目指す研究に取り組んだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1. 子育て困難という社会的課題に対し、学術横断的な総合研究のアプローチにより、教育学のパラダイム転換の方向性を示すことができた。
2. 生涯発達課題としての「親性」生成を基軸にすることで、子どもの養育責任を、親だけでなく社会の全成員の責任と捉える観点を提示し、「協同子育て実践学」研究の学問領域を開拓し、教育学の新たな展開の可能性に貢献した。
3. 「親性」を問う基礎研究の成果を「親性」生成実践プログラムに展開。実践基盤を、家庭・学校・諸施設等に措定したが、なかでも大学も含む諸学校の教育課程にその成果を組み込み、家庭科教育に収まりきらない新たな

研究成果の概要（英文）：We adopt a paradigm shift in taking a cross-disciplinary approach to finding solutions for various current difficulties confronted by child-rearing in Japan. We conducted practical studies on 'parenthood' (Oyasei in Japanese), encompassing both motherhood and fatherhood. Considering previous research on supporting parents and children, we regard 'parenthood' as a subject of lifelong learning, whereby all citizens should master the knowledge and skills required to care for and nurture children. So we approached our research as a field of "Collaborative Parenting Practice". We undertook interviews and dialogues in constructing educational programmes to generate 'parenthood' in families, schools, and other institutions. In particular, we aimed to incorporate our research findings into the curricula of secondary schools, colleges and universities, hoping thereby to construct a new model of parenting that extends beyond the traditional content of home economics education.

研究分野：教育学・教育史

キーワード：親性 共同子育て実践学 子育て支援 生涯発達 養育の社会化 家庭科教育 養育者教育 親性準備教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

子育てはもともと社会で共同化された営みであった。しかし近代以降、歴史的な大きな変化によって、子育ては家庭内での私的な営みとなってきた。近年では知識や経験もないうえに、援助を得る術さえ持たない、孤立した養育者による子育て上の諸問題(マルトリートメントなど)が顕在化している。こうした子育て困難な状況が、少子化の大きな要因のひとつを成している可能性が高い。

このような危機的な事態に対して、子育て支援に関わる研究は、各学問分野固有の視座からの域を出ていないようにみえる。従前の教育学や保育学では、子ども研究や子育て支援研究で応えようとしてきたが、その多くは、社会の成員全体を視野に入れた包括的な研究の観点を組み込んでこなかった。社会的養護としての子育て支援においても、当事者以外の人々を巻き込む観点が弱い。行政における施策でも、養育者自身の生涯発達という長期的な観点は見られず、妊産婦への保健指導や発達障害児の保護者への対処などといった、ピンポイント的なケアにとどまっている。たしかに、イギリスやフィンランドなど、成果をあげている統合的な教育や福祉の政策等が紹介されるなどしており、学术界からも、行政や市民との連携を求める論調は強まっているものの、実践的解決に向けては、いまだ見るべき成果は上がっていないと言わねばならない。

本研究は、こうした喫緊の社会的課題に対して、学術的な立場から応えようとするものである。従来の領域別に分断された諸学問の枠組みを問い直し、新たな教育学の領域を切り拓くべく(パラダイムシフト)、領域横断的な学術的挑戦をめざしたものである。

## 2. 研究の目的

誰もが養育者から養護や教育を受け、家族、地域、学校等で様々な支援を受けて成長していく。今日、教育は、諸文化のなかで持続的に学習し、生涯にわたって知的・情緒的・身体的に成熟に向かって発達する存在として、人間の成長をとらえるようになってきている。私たちはこうした生涯発達の観点から、「親性」の概念を基軸とした研究に着手した。「親性」(おやせい)とは、子育ての当事者に限らず、青少年も含めたすべての社会成員が、身につけるべき養育者としての資質をとらえる。具体的には、「親性」は、「母性」や「父性」を包摂した、子どもに関わりをもつ社会成員の誰もがそなえる 知識・スキル・心性 を内包するものと考えている。その意味で本研究では、「親性」を、人が成熟するために欠かせない生涯発達の課題であるとする観点を共有している。

問題の所在は、子どもや子育てをする親たちにあるのではなく、彼らをとりにくく社会の側にあるとらえている。私たちはその立場から、養育主体としての成熟の困難さや子育ての共同性喪失という問題を、学術的に解明する必要性をかねてから唱えてきた。成長して「おとな」になり、婚姻後に「親」になり「家庭」を作るといつかのパラダイムは、もはや

通用しない。家庭と地域社会の分断が進み、少子化が進むなか、家族内部においてもかつてのような親密な関係を前提にすることも難しくなっている。養育者の側から見れば、家庭という孤立した私的空間のなかで、地域やメディアなどの資源を活用しながら、子育てに従事しなければならない。この困難な状況を打開するためには、子育てを親の責任とする従前の意識を解き放ち、社会総がかりで子育てを担っていく具体的な方策を探求し提示していく必要がある。

そのために、これまでの養育・養護・教育の概念を捉え直し、人間の成長発達を総合的に捉える新たな教育学の枠組みを創出することを目的とした。教育は実践を前提にする。それゆえ、実践を組み込んだいわば「協同子育て実践学」の構築を目指すとともに、その実践主体に欠かせない「親性」生成を組み込んだ実践知の在り方を考察し、「協同子育て実践」のモデル的なプログラムと、その実践モデルにもとづく社会を学術的に構想することを掲げた。

協同子育て実践は、自らの子の養護や教育だけではなく、社会で共同して子育てを行う「親性」を身につけなければならない。「親性」は本能ではなく、人の生涯発達の中で、各自が有益な情報を選び取り（リテラシー）、社会のさまざまな成員と交流しながら育んでいく実践知である。それゆえ、研究者が一義的に提示できるものとは限らない。どこまでも実践現場で生きてくるものである。そのため実践基盤のなかでこそ、研究成果は展開されることになる。よって、研究は実践現場と相互に往還を繰り返しながら進められ深められなければならない。

### 3. 研究の方法

養育者としての「親性」は、生涯発達という観点のもと、膨大な情報の中から有益な情報を適切に選び取り、それを社会成員と協同しながら適切に運用していく「実践知」そのものである。そのため、実践知としての「親性」へのアプローチは、従来の単一の学問方法では対応できない。よって本研究は、哲学・歴史学といった教育学の理論研究に、保育学・発達心理学・比較教育学・家庭科教育学などの実践的学問を融合させた共同研究の方法をとった。多様なディシプリンをもつ研究者の学際横断的な共同研究であるが、融合の基軸を「親性」に設定した。ただ、子育てといった私的領域に踏み込む研究には意図せざる暴力や危険性が伴うことがある。その回避の観点から、問題を原理的に捉える理論研究から得られるがゆえに、本研究では理論研究を重視した。

研究は、各課題に応じて主な分担を決めて進めた。その分担と留意点は以下の通り。

1. 基軸としての「親性」と「協同子育て実践」については、メンバー誰もが共有する共通の研究課題とする。
2. 「親性」を生涯発達の文脈に位置づけた哲学・倫理学的研究
  - ・山名淳：ドイツ哲学とメモリーペダゴジーの観点からの「親性」とその生成
  - ・尾崎博美：ホーム概念とシティズンシップ教育からみた「親性」とその生成

3. 「親性」が生成・伝承されてきた共同体等の様態とその変遷
  - ・辻本雅史：日本の伝統的な共同体社会における「親性」の生成とその変遷
  - ・榎本恵理：日本近世の思想における社会情動的能力の醸成、伝承子ども遊びと「親性」生成
  - ・弘田陽介：日本近代の幼児教育思想と日本の哲学の関わりとその展開
4. 「親性」とその生成システムに関わる国際比較調査研究と、日本になじみやすい特質の研究
  - ・山崎洋子：イギリスの学校教育における親性準備教育とその教育システム
  - ・弘田陽介：ドイツの出産とそのケアの様態、へバメ等の役割
  - ・楊奕：中国の親教育の現状と幼児教育の制度と実態
5. 養育者と子どもの関係性に関する保育学・発達心理学・脳科学研究
  - ・榎本恵理：保育学と保育者養成教育
  - ・友田明美（研究協力者）：脳科学研究からみたマルトリートメントと「親性」
  - ・明和政子（研究協力者）：乳児の発達心理学と親子の関係性
6. 学校教育における「親性」準備教育
  - ・榎本恵理：「親性」に関する研究状況
  - ・正保正恵（研究協力者）：家庭科教育の現状と課題、「親性」生成のためのカリキュラム開発

担当課題に関する各自の研究課題や成果を、随時開催する研究会において進捗状況を報告、討論して、その成果を共有する。実施した研究会は以下のとおりである。

2019年度：2回（1/12-13，2/22）

2020年度：4回（8/30-31，2/13，2/27，3/20-21）

2021年度：2回（8/27-28，3/23-25）

2022年度：5回（8/23-25，12/03-04，2/19-20，3/16，3/18-20）

2023年度：4回（4/22，8/14-15，1/07，3/26-28）

○2023年度には、現地見学会（7月10日、大阪市立愛珠幼稚園〔日本2番目開設幼稚園〕）、日中国際シンポジウム（2023.12/03）も実施した。

研究成果については、各自が論文化し、関係学会において発表を行った。さらに、それらの成果について、実践現場へのアウトリーチ活動を積極的に行い、実践基盤と連携を深め協力関係を構築し、そこで見出された問題点等を研究に活かしていくよう努めた。

COVID-19 パンデミックのために、海外・国内の調査研究が困難をきわめたため、本研究計画は2年間延長を余儀なくされた。

#### 4. 研究成果

研究成果は以下の通りである。

1. 「親性」概念の学際的な把握・整理と現行の社会への接地について、以下の知見の共有

をみた。

すなわち従来、「母性」や「父性」として捉えられていた概念や、近年、家族社会学、発達心理学、家庭科教育学などで取り上げられていた「親性」概念を、学際的に把握することの意義・意味を確認することができた。それらの「親性」の共通原理を探り、本研究の眼目である社会成員全体での共有を図れるように、概念を整理した。加えて、現行の社会に接地できるように、現在の子育て当事者に配慮した概念を構成した。その結果、「親性」とは、子どもとその養育者の関係のみならず、子ども・養育者と彼らの生活をとりまく社会の調整の能力・スキル・心性を指すことが、研究者間で確認された。子育ての当事者たちは、たんに自らの家庭資源だけではなく、地域の社会的資源を用い、家庭 社会の間での関係性の濃度調整を行う。その調整配分は各家庭や子どもの発達の時期や方向性によってそれぞれ異なるが、養育者に内在する特性というよりも、むしろ関係性の調整能力・スキル・心性としての「親性」の把握の仕方を広めていくことによって、子育ての従来のパラダイムからの離脱を、広く社会成員に促していくことが不可欠である。

以上のような「親性」を社会成員各自が、身につけ共有することによって、子育ての困難な状況は改善され、子育ても含めた社会生活の営みが豊かになっていく、との確信を得た。その意味で、「親性」生成を基軸にした本研究は、社会の在り方自体のパラダイムシフトをも視野に入れて、今後に向けて新たな展開を切り拓く可能性に満ちていると考える。

2. この間の研究成果の公表は、以下の通り。

【雑誌掲載論文 14 本、出版書 5 冊（共著を含む）、学会発表 8 本】

3. 本研究は実践基盤との連携を重視した。その結果、以下の教育実践機関との連携が確保できた。これらの機関との連携は、研究のアウトリーチ活動と実践現場からの諸課題の提起とった点において、研究の活性化に大いに有益であった。

社団法人ひとみ学舎（徳島県鳴門市、居上公美子代表）、パドマ幼稚園（大阪市、秋田光彦園長）、メドウ子どもセンター（イギリス、ケンブリッジ市、純子グラント世話人）、フェニックスプライマリースクール（イギリス、ロンドン市、フォスケット元校長）、首都師範大学学前教育学院附属幼稚園（中国北京市、康麗穎院長）、公益財団法人前川財団（松本伸也理事長）

4. 2023 年日中シンポジウム開催により、中国研究者と学術交流した。とくに本研究の意義とその成果を中国の関連研究者に発信したことは、意義があった。

5. 研究成果を取りまとめて、「親性」生成を主題とした学術論文集の出版につなげ、さらに共同研究の成果を、一般市民向けの教養書にリライトして広く発信していく準備をしている。大学をはじめとした各種教育機関のテキストとなることをも想定している。

本研究の成果は【基盤研究（B）】（2021-2023）に発展的に継承された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 榎本恵理	4. 巻 12
2. 論文標題 子育て支援の背景と課題 「親性」教育の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 びわこ学院大学短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 153-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山名淳	4. 巻 53
2. 論文標題 パンデミックは授業に何をもたらしたのか 2020年度前期を振り返る	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 34-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大地宏子	4. 巻 13
2. 論文標題 女性雑誌にみる弘田龍太郎の音楽観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部大学 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎洋子	4. 巻 31
2. 論文標題 20世紀末以降のイングランドにおける保育・教育改革 - 多様な「言葉」によるアプローチの変遷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武庫川女子大学言語文化研究所年報	6. 最初と最後の頁 65-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上祐介, 弘田陽介	4. 巻 53
2. 論文標題 サイト・スペシフィック・アートを活用した子育て支援の研究 植物園と寺院での事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪城南女子短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HIROTA Yosuke, ZENG Haipeng, UEDA Kyo, YAMAMOTO Keisuke	4. 巻 8
2. 論文標題 Technical Report on Designing Video Documentation System on the Practice of Early Childhood Education and Care, Utilizing Automatic Face and Emotion Recognition	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎洋子	4. 巻 43
2. 論文標題 教育学の立場から子どもの幸福と教育を考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西教育学会年報	6. 最初と最後の頁 149-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎本恵理	4. 巻 11
2. 論文標題 「親性」教育の現在 「家庭科」における保育教育をてがかりにして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 びわこ学院大学・びわこ学院短期大学部紀要	6. 最初と最後の頁 73-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊奕	4. 巻 14
2. 論文標題 中国における小学校英語教育の現状と教員養成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楊奕	4. 巻 12
2. 論文標題 教育実習指導における身体知の習得に関する基礎的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大地宏子	4. 巻 12
2. 論文標題 弘田龍太郎と工場音楽	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 69 - 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 榎本恵理・杉本栄子
2. 発表標題 コロナ禍における幼児のコミュニケーション力育成
3. 学会等名 第75回日本保育学会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 榎本恵理
2. 発表標題 メディアとしての和歌 声と文字
3. 学会等名 本居宣長記念館・宣長十講（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 榎本恵理、杉本栄子
2. 発表標題 紙芝居の語りと効果的实践に向けての研究（1）
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉本栄子・榎本恵理
2. 発表標題 紙芝居の語りと効果的实践に向けての研究（2）
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 榎本恵理
2. 発表標題 紙芝居の語りと効果的实践に向けて
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 HIROTA YOSUKE
2. 発表標題 The idea of nature in today ' s early childhood education based on the observation and participation into Japanese kindergarten
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019 ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 弘田陽介
2. 発表標題 ドイツの助産師による親支援の紹介
3. 学会等名 科研・パラダイム転換にもとづく「親性」の総合的研究, 研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎洋子
2. 発表標題 『子ども集団歩き遍路』と子どもの育ち
3. 学会等名 前川財団第10回未来教育シンポジウム ( 招待講演 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻本雅史
2. 発表標題 「寄ってたかって」の子育て
3. 学会等名 前川財団第11回未来教育シンポジウム ( 招待講演 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 楊奕
2. 発表標題 日本における教員養成の特徴およびその問題点 - 幼稚園教諭の素質能力の育成を中心に
3. 学会等名 中国人類学民族学教育人類学学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎本恵理、杉本栄子
2. 発表標題 絵本を素材とした「語る力」の研究（2）
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 山名淳編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 324
3. 書名 記憶と想起の教育学 メモリー・ペダゴジー、教育哲学からのアプローチ	

1. 著者名 山田 礼子編、楊奕分担執筆	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 320
3. 書名 STEM高等教育とグローバル・コンピテンス	

1. 著者名 弘田 陽介、棚澤 明子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 184
3. 書名 いま、子育てどうする？感染症・災害・AI時代を親子で生き抜くヒント集35	

1. 著者名 中部大学現代教育研究所編（楊奕）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学術図書出版社	5. 総ページ数 205
3. 書名 コロナ禍における教育とポスト・コロナ時代の教育	

1. 著者名 公益財団法人前川財団（辻本雅史、山崎洋子、榎本恵理）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 公益財団法人前川財団	5. 総ページ数 165
3. 書名 子どもの育ち、親の育ち：前川財団未来シンポジウム講演集 4	

1. 著者名 弘田陽介, 村上祐介, 應典院	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ふくろう出版	5. 総ページ数 140
3. 書名 キッズ・ミート・アート 子どもと出会い、すれ違うアート	

1. 著者名 岡本正子・中山あおい・二井仁美・椎名篤子（山崎洋子分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 イギリスの子ども虐待防止とセーフガーディング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	楊 奕 (Yang Yi) (60580751)	中部大学・現代教育学部・准教授  (33910)	
研究分担者	大地 宏子 (Ochi Hiroko) (80413160)	中部大学・現代教育学部・准教授  (33910)	
研究分担者	山崎 洋子 (Yamasaki Yoko) (40311823)	武庫川女子大学・言語文化研究所・嘱託研究員  (34517)	
研究分担者	弘田 陽介 (Hirota Yosuke) (60440963)	大阪公立大学・大学院文学研究科・教授  (24405)	
研究分担者	山名 淳 (Yamana Jun) (80240050)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授  (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	榎本 恵理  (Enomoto Eri)  (00779449)	びわこ学院大学短期大学部・その他部局等・教授    (44205)	
研究分担者	尾崎 博美  (Ozaki Hiromi)  (10528590)	東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授    (32718)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	友田 明美  (Tomoda Akemi)		
研究協力者	生田 久美子  (Ikuta Kumiko)		
研究協力者	明和 政子  (Myowa Masako)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関